



Data

監督・脚本：キム・ギドク
 出演：藤井美菜 / チャン・グンソク
 / アン・ソンギ / イ・ソンジ
 エ / リュ・スンボム / ソン・ギユン / オダギリジョー

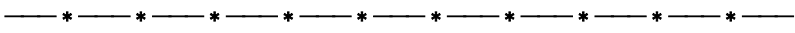
👁️👁️ みどころ

私の大好きなキム・ギドク監督は「韓国の異端児」「鬼才」と呼ばれていたが、本作では「狂才」に格上げ！？ダイヤモンド・プリンセス号ならぬ退役軍艦でのクルーズの旅は、新型コロナウイルス禍とは異質の「人間という名の欲望が暴走する」大事件に！

不沈の旅客船タイタニック号は処女航海でもろくも沈んでしまったが、本作の退役軍艦はある日突然、空中に浮かぶ超自然現象に遭遇！そこで起きた食糧危機は格差問題をはるかに越えた対立・抗争を生み、権力闘争から遂には殺し合いに！しかし、その勝者は？

韓国の国民的俳優アン・ソンギが、セリフなしで挑む「謎の老人」はいかなる役割を？また、日韓を股にかけるキム・ギドク好みの日本人女優・藤井美菜はどんなしたたかさを？

こりゃ必見！キム・ギドク監督健在なり！更なる次回作を期待！



■狂才キム・ギドクはどんなディストピアの世界を演出？■

本作のパンフレットにある「キム・ギドク監督プロフィール」には、1996年のデビュー作『鰐〜ワニ〜』から最新の『The NET 網に囚われた男』(16年) (『シネマ 39』145頁) まで計22作が掲載されているが、私はそのほとんどを観ている。彼の天才ぶりを示すのは、『アリラン』(11年) (『シネマ 28』206頁) でカンヌ国際映画祭ある視点部門最優秀作品賞、『うつけみ』(04年) (『シネマ 10』318頁) でヴェネチア国際映画祭銀獅子賞 (監督賞)、『サマリア』(04年) (『シネマ 7』396頁) でベルリン国際映画祭銀熊賞 (監督賞)、

と世界三大映画祭を制覇していることだ。しかし、他方で彼は08年の『悲夢』（『シネマ22』232頁）から11年の『アリラン』まで一時映画界から姿を消し、隠遁生活に入っていたから、この時には彼の監督生命は終えたと言われていた。そんな彼を、かつては「韓国の異端児」と呼び、また「鬼才」と呼んでいたが、本作のパンフレットでは「狂才キム・ギドク！」と称している。

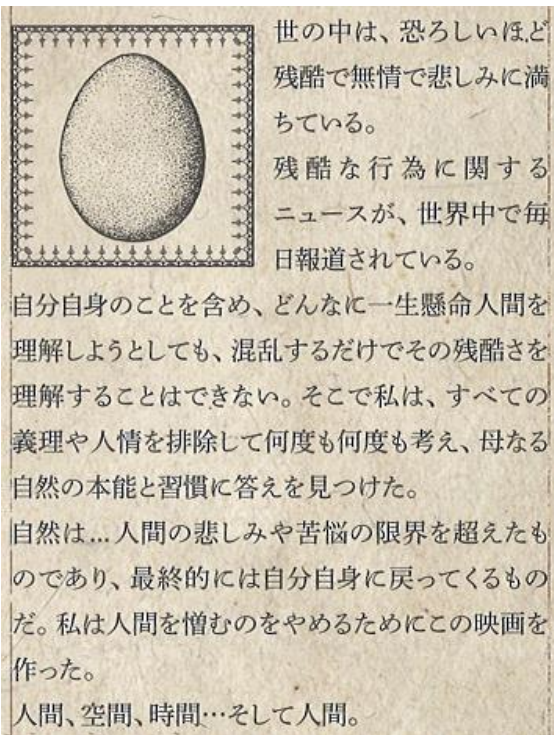
本作のジャンルは「ディストピア」。世界中に「ディストピア」の名作は多いが、本作は、休暇に向かう多くの人々を乗せて大海原へのクルーズの旅に出発する退役した軍艦を舞台にしたもの。そう聞くと、キム・ギドク監督は早くもイギリス船籍のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」で起きた新型コロナウイルス騒動を映画にしたの？一瞬そう思ったが、さすがに2018年公開の本作で、それはない。本作では軍艦の名前は明示されないし、もちろん「ダイヤモンド・プリンセス」や、あの「タイタニック」ほど豪華ではない。また、元軍艦だから、大砲があり、厚い鉄板に覆われ、客室(?)の窓も小さいから、全体の姿が無骨なのは仕方ない。しかし、それでも乗客たちはこれからのクルーズを楽しみにしているようだ。

さあ、韓国の狂才、キム・ギドクはそんな軍艦を舞台に、どんなディストピアの世界を演出するの？

■□私は人間を憎むのをやめるためにこの映画を作った?■□

吉野家が1970年代に全国のチェーン店化を進めた時のキャッチフレーズは「早い、うまい、安い」だったが、キム・ギドク作品のそれは「早い、面白い、安い」。また、そのテーマはさまざまだが、一作ごとに設定されたテーマはトコトン凝縮されているので、そのテーマごとの問題提起は衝撃的な映像と共に、他に類を見ない強烈なメッセージを放っている。そのため、彼の作品は公開されるごとに賛否両論を含め常に物議を醸し出すことになるわけだ。近時は『殺されたミンジュ』（14年）（『シネマ37』185頁）こそ「サスペンスもの」だったが、『メビウス』（13年）（『シネマ35』170頁）、『STOP』（15年）（『シネマ40』265頁）、『The NET 網に囚われた男』と立て続けに政治的メッセージの強い作品を発表している。それは、2011年の3.11福島原発事故や緊張する南北関係・南北情勢を踏まえたものだが、今、狂才キム・ギドク監督の頭の中に浮かぶディストピアとはどんな世界？

アメリカのテネシー・ウィリアムズの名作に戯曲『欲望という名の電車』（47年）があり、私は大学時代にそれをテーマにした文学談義を何度もやったが、本作のパンフレットには監督メッセージがあり、そのタイトルは「人間という名の欲望が暴走する——。」とされている。そう聞いても、わかったようなわからないようなイメージだから、あえて監督メッセージの全文を転載すれば、次のとおりだ。



ちなみに、本作の邦題は『人間の時間』だが、原題は『Human, Space, Time and Human』だから、上記の「人間、空間、時間・・・そして人間。」という監督の最新のメッセージをすべて含めている。ところが、邦題は空間をカットしているうえ、ラストに人間を再掲するのもサボっているから果たしてこの邦題でいいの？本作鑑賞後は、それもじっくり考えたい。

■□■まずは、2人の日本人男女（夫妻）に注目！■□■

「日中を行き来する女優」の代表といえば、昔は中野良子だけだったが、今はたくさんいる。それに対して、「日韓を行き来する女優」といえば、かつてはキム・ギドク監督の『絶対の愛』（06年）（『シネマ13』86頁）にも出演した女優・杉野希妃だった。彼女は今は監督稼業に集中しているようだが、近時の「日韓を行き来する女優」は、私が本作ではじめて知った藤井美菜らしい。私は彼女の出演作を一本も観ていないが、本作導入部でその藤井美菜がかわいらしいワンピース姿のイヴ役で登場すると、たしかに個性的で、杉野希妃と同じようにキム・ギドク監督好みの顔立ちだ。他方、新婚旅行にこのクルーズを選んだ男を演ずるのは、キム・ギドク監督と親交の深いオダギリジョーだ。

映画検定3級を持つ私が学んだ教科書『映画検定 公式テキストブック』（202頁）によれば、「グランド・ホテル形式」とは、『グランド・ホテル』（32年）（『シネマ16』116頁）に由来するもので、一つの場所を舞台に複数人々のドラマを並行して描くもの。そうすると、本作はまさにそれ。舞台は退役軍艦だけで、たまたまそのクルーズに乗り合わせた多種多様な人物たちのドラマを並行して描くものだ。そのため、本作導入部で、キム・ギドク監督はほぼ平等にこのクルーズに乗り合わせた乗客や船長たちを紹介してくれる。しかし、そこでのイヴとその夫は新婚旅行にこの軍艦クルーズを選んだ日本人夫妻として紹介されるだけだから、彼らが後に本作のどこでどんな役割を演じるのかは全くわからない。そして、イヴの夫はいかにも正義感の強い若者（若造？）というキャラクターだが、クルーズ船の中でそんなに突っ張った彼はどうなるの？

他方、このクルーズには明らかに売春婦とわかる3人の女たちが乗り込んでいるが、これはいかにもキム・ギドク映画らしい。つまり、こんな女たちは普通なら乗船を拒否されるどころだが、キム・ギドク映画ならギャングのボス（リュ・スンボム）率いるギャング団の乗船が許可されているのと同じように、OKらしい。本作のテーマは「人間という名の欲望が暴走する——。」だから、乗り合わせた軍艦クルーズの中で、このギャングたちと売春婦がお楽しみタイムを持つのは自由。しかし、いくら何でも若造が生意気な口をきくから、その男を殺して海の中へ投げ込んだうえ、新婚旅行に来ているその妻イヴを強姦するというのは如何なもの。しかし、狂才キム・ギドクの脚本・演出なら当然それもありらしい。それどころか、強姦するのがイヴの清楚な美しさに目をつけた政治家（イ・ソンジェ）だけでなく、そのお膳立てをしたギャングのボスもお裾分けとばかりに先にいただいたうえ、政治家から陵辱され気を失ったまま寝入っているイヴの身体を、更に息子のアダム（チャン・グンソク）が弄ぶのだからいやはや・・・。

本作導入部では、まずはそんな2人の日本人（夫妻）に注目！と言っても、夫の方はあっさり海の藻屑と消えてしまったから、残された新妻のイヴはこの後どうするの？

■□■主役は政治家二世！このダメ男の成長は如何に？■□■

現在の安倍晋三総理や将来の総理大臣候補と言われている小泉進次郎のように、政治家には2世が多い。「パパ・ブッシュ」ことジョージ・H・W・ブッシュに続いて2代とも大統領になったアメリカのジョージ・W・ブッシュも2世だ。しかし、本作導入部で父親から「将来どうする？」と問われた息子のアダムは、「政治家にはなりたくない」と答えていたが、さて？

2世議員には先代に比べると、共通してどこかに甘さやひ弱さがつきまとうが、それはアダムも同じ。口先では、食事の質や量の「差別」について、正義の味方のように文句を付けてきたイヴの夫を支持するようなことを言っている、いざ失神したイヴの美しい裸体を見るとつい・・・。これでは、言行不一致と言われても仕方ない。アダムを演ず

るのは韓国のみならず日本でもペ・ヨンジュン以上の人気を誇る若手俳優チャン・グンソクだが、前半ではそのダメ男ぶりが目につくので、それに注目！

本作が「ディストピア」映画になるのは、大海原を航行していたはずの船の周りから突然海が消え去り、空にぼっかり浮かんでしまうという超自然現象に出会った時からだが、そこで現実的な問題として急浮上してきたのが食糧問題。つまり、船の中に貯蔵してある食料品はいつまでもつのか？という単純な問題だ。船の指揮権を持つのは本来船長（ソン・ギユン）だが、こんな非常事態の中では、「それは俺が持つ！」と宣言したのがアダムのお父親。そして、それを銃で脅しながら支持したのがギャングのボスだ。そのため、以降「指導者たち」はまともな食事を食べていたが、その他の「一般乗客」は一日一食、おにぎりだけという極端な差別待遇に。ここでも政治家2世のアダムは、口先だけは「そんな不平等は良くない」と言っていたが、それでも自分は指導部の食事をしっかり食べていたからアレ・・・。

カンヌ国際映画祭では、是枝監督の『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）とポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）という格差問題を鋭く描いた映画が2年連続してパルムドール賞を受賞したし、第92回アカデミー賞でも格差から這い上がってダークヒーローになった男を主人公にした『JOKER ジョーカー』（19年）が主演男優賞を受賞した。そんな「格差批判」の目で本作前半を見ると、キム・ギドク監督は一見、政治家の権力とそれを支えるギャングの暴力によって格差が生まれることを肯定しているかのように見えるが、さて・・・？本作前半はそんなダメ男ぶりを見せる政治家2世のアダムだが、次第に食糧危機が深刻になり、人間（乗客）の欲望が露わになってくる中、対立・抗争が激化してくると、このダメ男は少しずつ成長していき、後半の主役になっていくから、それに注目！

■□■対立・抗争激化の中に見る人間の欲望とは？■□■

キム・ギドク監督は、本作導入部でギャングのボスを通して（？）「人間の欲望」としてごく当たり前の酒、ドラッグ、セックス等を示していく。また、本作は「グランド・ホテル形式」の「ディストピアもの」だから、最初から登場人物のキャラはハッキリ固定されているのでわかりやすい。冒頭から、船長と政治家との権力トップを巡る小競り合いはあるものの、軍艦に超自然現象が発生すると、政治家が権力を掌握。やはり、いつの時代でも軍事力をバックにした政権が強いわけだ。そして、前半では強姦という許されざる犯罪を含むキム・ギドク監督流の「人間の欲望」の発散風景が随所で展開するが、超自然現象の中で食糧危機が顕著になってくると、食料への不平不満から生じる対立・抗争が激化し、それが反乱や武装蜂起そして権力闘争へと発展していくから、その姿をしっかり観察したい。導入部でイヴの夫が主張していたことはすべて正論だが、彼はギャングのボスの暴力によってあっさり抹消されてしまった。また、クルーズに乗り合わせていた若者のグルー

プたちは、それすら主張できない「一般大衆」だから、今、一日一食の待遇に不平不満あっても、それを解消する手段・方法は持ち合わせていない。それに対して、船長はさすがプロ。暴力には暴力が必要と考えた船長は、使っていない保管庫の中を探ることによって大量の手榴弾を発見したから、これを使えば武装蜂起による権力奪還が可能。そう考えたのは当然だ。すると、その後はそのタイミングをはかるだけだが・・・。

私は、学生運動に没頭していた時期に、さまざまなマルクス・レーニン主義の文献を読んだが、「ドイツ・イデオロギー」や「帝国主義論」における権力闘争の姿は興味深かった。しかし、本作を見ていると、「グランド・ホテル」ならぬ「退役軍艦」を舞台にした食糧危機が深刻化する中での、人間の欲望を軸とした権力闘争の姿はそれと同じだ。ロシア革命ではトロツキー等多くの政敵を倒してレーニンが勝利したが、さて、このクルーズ船での勝者は？

■謎の老人は一体何を？これぞキム・ギドクの世界！■

政治家2世のアダムを演ずるチャン・グンソクが「日韓を股にかけた人気若手俳優」なら、本作で「謎の老人」役を演じているアン・ソンギは「韓国の国民的俳優」。アン・ソンギは子役の時代から有名だったそうだが、3月21日に観たキム・ギヨン監督の『下女』(60年)で、はじめてその子役時代の姿を発見！1952年1月1日生まれの彼の出演作は多く、私が観たものだけでも、『風吹く良き日』(80年)、『シネマ27』209頁)、『ディープ・ブルー・ナイト』(85年)、『シネマ2』233頁)、『神さまこんにちわ』(87年)、『シネマ2』232頁)、『MUSA-武士-』(01年)、『シネマ4』54頁)、『酔画仙』(02年)、『シネマ7』202頁)、『ピアノを弾く大統領』(02年)、『シネマ9』148頁)、『シルミド』(03年)、『シネマ4』202頁)、『デュエリスト』(05年)、『シネマ10』117頁)、『墨攻』(06年)、『シネマ14』286頁)、『シネマ17』128頁)、『光州5・18』(07年)、『シネマ19』78頁)、『第7鉱区』(11年)、『シネマ27』71頁)、『ザ・タワー-超高層ビル大火災』(12年)、『シネマ31』169頁)、『ラスト ナイツ』(15年)、『シネマ37』71頁)がある。

そんなアン・ソンギ演ずる「謎の老人」は、新婚旅行中の夫を殺され、3人の男たちに陵辱され、自殺しようとしていたイヴを助けることで大きな役割を果たしている。しかし、セリフが何一つなく、イヴから何を質問されても少し微笑むだけなのが彼の特徴だ。他方、クルーズの客であるはずの彼はいつも、土を集め、小さい植木鉢で種を育てているが、その意図はイヴにも観客にもサッパリわからない。しかし、食料品を巡る船内での対立・抗争が激化し、死者が出始めると、彼は包丁を持って、その死体を切り刻んでいたから、この老人は恐い。ちなみに、塚本晋也が監督・脚本・編集・撮影・製作のうえ、主演までした『野火』(14年)、『シネマ36』22頁)では、塚本監督は、イモ、塩、猿から人肉食まで、現実主義(?)を徹底させていたが、ひょっとしてキム・ギドク監督は本作後半のテーマをそれと同じような、人肉食に・・・？

■□■韓国では冷遇？でも映画作りは労働！1年に1本！■□■

本作のパンフレットには4頁にわたる「キム・ギドク監督インタビュー」があり、そこでは樋口毅宏氏（作家）がインタビュアーとして鋭い質問を放ち、監督がそれに真正面から回答している。そこで、私が最も注目したのは、樋口氏はキム・ギドク監督を「あなたはやはり世界の潮流とは無縁の、孤高の映画監督ですね。」「やっぱり『人類がまだ観たことがないような映画』を撮ろうとしていますね。」と位置づけたうえ、「にもかかわらず、『人間の時間』は韓国ではいまだに上映されていないと聞きました。これまでのあなたの作品も、本国ではひどい扱いを受けています。どうすれば韓国はあなたを正当に評価するでしょうか？」と質問していること。この回答は難しいが、キム・ギドク監督は、これには軽く受け流しているようで、その即応の妙を味わいたい。

他方、「あなた海外のビッグタイトルをほぼ総なめしておきながら、何度も言いますがいまだに本国では冷遇されています。3つの条件が揃わないままなのに、どうしてあなたは映画を撮り続けることができているのでしょうか。」との質問に対して、彼は「私は1年に1本の割合で映画をコンスタントに撮っています。映画は私にとって労働です。私は映画を作る労働者だと思っています。映画を撮るのに重要なことは製作費です。だから自分でシナリオを書き、監督も撮影も編集も録音も自分でやることで製作費を抑えています（苦笑）。そして、映画においてもっとも重要なのはシナリオです。低予算ながら、何を伝えるか、どんな物語を撮るか、ずっと考えていて、努力を怠りません。」と真正面から答えているので、これに最注目したい。ちなみに、私は『シネマ 1』を出版して以来、今日まで約20年の間に計45冊の映画評論本『シネマルーム』を出版してきたが、それはすべて採算が取れず赤字のまま。それにもかかわらず、今もそれをずっと続けているが、それは一体なぜ？そう考えながら、このキム・ギドク監督の回答を読んでいると、私は妙に納得感が・・・。

そして、最後の質問、「あなたは2005年の作品、『弓』のラストで、「ぴんと張った糸には強さと美しい音色がある。死ぬまで弓のように生きていたい」と書きました。あなたはいま、弓のように生きていますか？」に対する彼の答えは、「いつも頭の中に刻んでいます。私はこれから歳を取ってもシナリオを書き、映画を撮り続けたいと思っています。そして映画を通して人生を悟っていきたいのです。」だ。何とすばらしい回答だろう。本作はクライマックスに向けて恐い恐いシークエンスが増えていくが、最後の最後はいかにもキム・ギドク監督らしい寓話になる。それには賛否両論があるだろうが、久しぶりにキム・ギドク監督が描く「ディストピア」の世界をじっくり味わいたい。

2020（令和2）年3月30日記